

1981年に国際連合が定めた「国際障害者年」以降、「障害」に対するとらえ方も様変わりしている。従来、「障害」、「障害者」は疾病や事故等の怪我などを原因とし、その結果生じる医学モデルとしてのとらえ方が一般的であった。そして、それはまた個人の問題として扱われ、帰結されてきた。障害を抱える個人が、いかにして社会に適応するのか、そのためには医療はどうあるべきか、またリハビリテーション、社会福祉の枠組みはいかにあるべきかを真摯に追求し、社会に適合できる障害者像を目標に障害者本人の努力を必要不可欠な要素として深化してきた。

しかし、「障害者の社会への完全参加と平等」をスローガンとする国際障害者年は不可視化されることの多い障害者の存在を社会に知らしめ、すべての人間を包摂する社会のあり方を提唱した。それ以降、障害に対する国際的な認識は劇的に変化している。その背景には1983年から1992年までの「国連・障害者の10年」をはじめとして、長期に及ぶ国際連合の運動が各国の意識に大きく影響を与えている。とりわけ、1993年には「障害者の機会均等化に関する基準規則」が採択されている。この機会均等化とは、社会の制度・システムはすべての人々が利用できるものでなければならないことを示している。具体的には、法整備、社会環境整備、所得保障と社会保障、教育と訓練、雇用、レクリエーションといった社会のさまざまな仕組みを障害者も含めたすべての人々が利用できるように改善することである。また、障害者は他の人々と同様に自らの意志に基づき自己管理、自己決定できる権利を持つ主体的存在であることに言及している。この機会均等化規則は、「隔離と保護」を重視する当時の障害者施策に新たなパラダイム移行の契機となった。

加えて、障害を理由とした差別を禁止する「障害者の権利条約」が2006年に国連で採択された意義は大きい。それは、障害者の社会への参加は従来の「個人の努力的適応」から「社会が障害者に適応すべき」という発想への大転換であった。「障害」は社会との関係性によって生じるという新たな視点であり、社会に存在するさまざまな障壁を除去することが21世紀に生きる我々の社会的責務としたことである。

こうした考え方を基に社会との関係性、文化で障害をとらえる学問が「障害学」である。

今回出版された『よくわかる障害学』は、「学」におぼれることなく、障害当事者の生の声をしっかりとらえ、その具体的な語りを受けとめながら障害学を学ぶことを狙いとしている。特に本書は障害学になじみの薄いと思われる工学・医療系の学生を想定して編集されている。また、さまざまな機器開発や支援技術を通じて「障害」を理解することに焦点があてられている。

第I章では、障害学に関連する用語を紹介しながら、社会を改革するうえでの必要なプロセスを例示している。第II章は、

障害者が利用する福祉機器がどのような視点で開発されるべきなのかを示し、その開発にあたっての障害者の役割、機器の規格、指針が示されている。第III章では、障害者が支援機器をどのように活用し、自らの生活を充実させているかを利用者の立場で紹介している。機器の至便さを求

めるだけでなく、それらが個々の人生にどのようにかわり、共存するのかに言及している。第IV章は、障害当事者の生活を赤裸々に紹介し、その障害者の内的から発せられるパワーと機器との関係性に触れている。第V章では、リハビリテーション工学、義肢装具、作業療法、理学療法、教育、製品開発、デザイン領域において将来、また日常的に支援する側の者にとってどうあるべきかについて言及している。第VI章は、障害に関わる制度の歴史的経緯が詳述されている。おもな内容は、障害児・者教育、社会福祉、雇用などに関する法制度、障害者運動、国際連合を中心とする国際的動向に焦点をあてている。障害者運動の歴史とその当事者の社会への熱き願いによって諸制度が作られ、発展してきた過程を知ることが不可欠な基礎的知識でもある。第VII章では、わが国における現在の法制度がいまだに障害者の暮らしに十分機能していない実態を明らかにしている。こうした理想と現実のギャップを理解し、このジレンマにどのように取り組むのかを考えさせる章となっている。最終章である第VIII章では、障害学における論争的な課題が提起されている。障害学に向かうには、とりわけ現代社会を批判的、多角的に検証する力が必要であり、社会を俯瞰的にみると同時に個々の人間が障害とどのように向き合っているのかを「共感的」に理解することの重要性を論じている。

本書の構成は次の通りである。

- I 工学・医療・福祉のための障害学入門
- II 機器開発とユーザー視点
- III 工学技術と障害者の暮らし
- IV 暮らしのなかでの障害
- V 支援の現場、支援の仕事
- VI 支援を支える制度：歴史的展開
- VII 支援にかかわる制度のジレンマ
- VIII 障害学の思想

